

保元物語 平治物語

たかはし ゆうすけ
高橋 悠介

(附属研究所斯道文庫教授)

保元物語・平治物語は、平家物語や太平記の影に隠れがちだが、前期軍記として重要な作品で、武士台頭の画期となった戦乱を描いている。琵琶法師が平家物語のみならず保元物語・平治物語も共にそらんじて語っていたことは、永仁5年(1297)の序文を持つ普通唱導集にもみえており、これらの軍記物語は相互に影響を与え合っていた。

保元元年(1156)に鳥羽院が崩御した後、第一子の崇徳上皇と、第四子の後白河天皇が対立し、摂関家における藤原頼長と忠通の対立とも結び付き、上皇方は源為義・為朝父子や平忠正など、天皇方は源義朝や平清盛などの武士団を招集して、軍事衝突となった。これが保元の乱で、崇徳上皇方が敗れて、崇徳上皇は讃岐国に流され、藤原頼長は矢傷がもとで死去、源為義や平忠正とその子息達も斬られる。

保元の乱後、後白河天皇は讓位して上皇となり、二条天皇が即位するが、後白河院の近臣の信西と藤原信頼の対立や、二条天皇親政派の存在、源氏・平氏の対立などが絡み合う政治状況となる。信西に対立する藤原信頼が院御所の三条殿を襲撃することで始まったのが平治の乱で、後白河院は大内裏に幽閉され、逃亡していた信西も見つけられて首を晒される。しかし、信西に厚遇されていた平清盛が熊野参詣から帰京し、天皇と上皇が宮中を脱出して状況が変わる。平氏軍は大内裏を襲撃した後、敵を六波羅に引付けて勝利し、最終的に信頼は処刑、信頼方の源義朝も逃亡先で謀殺される。

藤原忠通の子、慈円が『愚管抄』の中で

鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コト
ハヲコリテ、後ムサノ世ニナリニケルナリ

と書き、保元の乱が契機となって「ムサ(武者)ノ世」が到来したという認識を示すように、武士が存在感を増し、日本史上の画期となった戦乱であった。

この保元の乱・平治の乱という歴史的事件を物語化した保元物語・平治物語は、共に書写されることも多く、本書も両者を同一人物が書写した本である。平家物語がそうであるように、保元物語・平治物語

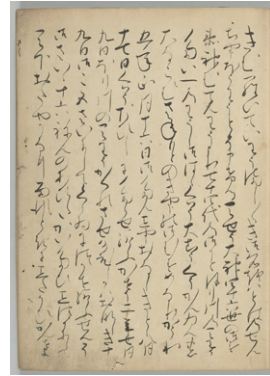


図1 保元物語・巻首



図2 平治物語(左:表紙 右:巻首)

も本文が次々に改作され、多様な伝本が生み出されたことから、特に江戸初期以前の写本は、1点1点の研究的価値が高い。斯道文庫に所蔵される、古態本文を伝えると評価される半井本系統の保元物語も、室町末期から江戸初期にかけての写本である。

保元物語・平治物語の諸本の比較検討については、水戸藩での『大日本史』編纂に伴って制作され、元禄6年(1693)に刊行された『参考保元物語』『参考平治物語』が著名である。徳川光圀の命のもと、水戸の今井弘濟や内藤貞顕らが、流布本と古写本の諸本を校合し、物語の記事を諸記録とも対照した結果をまとめたものである。現代では、軍記研究者による諸本研究や分類論が深まり、武久堅氏監修『保元物語六本対観表』(和泉書院, 2004年)や、笠栄治氏著『平治物語研究 校本篇』(桜楓社, 1981年)といった諸本の異同を示す本も刊行されている。

本書の本文は、古活字本等の流布本系統とは明ら

かに異なるもので、流布本成立以前の古態やその変化を探る上で、重要な伝本とみられる。流布本には文安3年(1446)の奥書を持つ『壺囊鈔』^{あいのうしやう}が用いられていることから、それ以後の成立であることが知られるが、そうした流布本成立以前の本文の流動を物語る伝本ということになる。

保元物語は、近年の研究では8系統ないし10系統に分類される。本書はそのうち、永積安明氏が京都大学附属図書館蔵本に因んで「第三類 京図本系統」と呼び、犬井善壽氏が筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本に因んで「根津本系統」と呼んだ、第三類系統に近い特色を備えている。下巻で源義朝の幼少の弟が悉く殺害された経緯を描く章段のうち、乙若と乳母の源八とが手を取って死別を歎く記事や、内記平太の嘆きを記す記事など、この系統に特有のまとまった記事も確認できる。平仮名を主体とした漢字平仮名交じり文の文体も、京都大学附属図書館蔵本などに近い。一方、平治物語は永積氏のⅡ系統分類の中、「第四類 金刀本系統」の本文に近いが、中巻に平重盛が清盛に対し後白河院の仰せとして信頼の助命を頼む特異な記事があり、この記事は同系統の中でも独自性の強い東京大学国語研究室蔵本と共通性が高い。

なお、保元物語・平治物語とも内題がないが、平治物語の上中下3冊は通例の3巻構成に対応するものの、保元物語の上下2冊は通例の3巻構成とは異なり、寛永元年の製版本でいえば中巻の「関白殿本官に帰復し給ふ事」に相当する部分からが下冊となっている。第三類の諸本のうち、京都大学国史研究室蔵本、また蓬左文庫蔵や神宮文庫蔵の一本などは、同様の箇所 で分巻する二巻本である。

本書は、いずれも縦が29.5糎に及ぶ袋綴(五つ目綴)の大本で、押八双を有する紺表紙中央に金紙題簽を貼り、しかるべき大名家などに所蔵されていてもおかしくない風格を備えている。本文は5冊とも一筆で書かれており、奥書はないが、保元物語・平治物語の各本文末尾に、同じ花押がある。



図3 末尾の花押(左:保元物語 右:平治物語)

現時点では誰の花押か不明だが、書写者・旧蔵者に関わる花押と思われる。

本書は先行する何らかの写本を転写したものが、その親本には字の誤りが含まれていたようで、写す際に親本の本文のままに写した上で、右脇に「本ノまゝ」と注記を加えている例が複数ある。一方で、字をすり消した上で、上から訂正した字を書いた箇所も所々に見られる。全体にわたり親本に忠実に写しているならば、写し誤った箇所を訂正しているのかもしれないが、あるいは別な事情で訂正している可能性もある。

本学の前期軍記の蔵書としては、慶應義塾図書館に平治物語の古活字版も所蔵されており、斯道文庫に、保元物語の半井本系統の写本や、金刀比羅本系統の室町末期写本(中巻のみ存)など、またセンチュリー赤尾コレクションに、奈良絵本改装絵巻の平治物語の江戸前期写本などがある。近時、図書館に備わった本書は、これらとも異なる系統の本文を伝えるもので、保元物語・平治物語の本文の流動と展開を伝える貴重な資料である。研究教育に活用されることを願っている。

【略書誌】

保元物語2巻 平治物語3巻 [江戸初期] 写大本
5冊 請求記号 [110X@682@5]
紺表紙(29.5×22.6糎)、押八双あり、袋綴(五つ目綴)、料紙楮紙打紙。表紙中央に「保元物語上(下)」「平治物語上(中・下)」と墨書した金紙題簽を貼付。内題なし。無辺無界、字面約27.5×19.0糎。毎半葉11行、毎行20字前後。各冊丁数、保元物語上40丁、下51丁、平治物語上41丁、中36丁、下36丁。保元物語下、及び平治物語下の末尾に、不明花押あり。小口書は「保元物語上(中・下)」「平治物語上(下)」と巻立を誤記した後に、実態に合わせて訂正注記する。若干の虫損もあるが、状態はおおむね良好。
なお、縹色の布帙(金泥花模様入茶題簽「保元物語式冊/平治物語 三冊」)が備わり、帙内側の緞子地には和歌色紙三枚を貼り込む。各色紙には、(1)「尋きて」歌([飛鳥井雅経]。光悦流書体)、(2)「よのなかに」歌(在原業平。伝平松時方筆・大倉汲水極札添付)、(3)「したもへに」歌(俊成女。伝船橋秀賢筆・大倉汲水極札添付)が書かれている。